

# Gandhāra における土器の様相<sup>1)</sup>

桑 山 正 進

## 1. いわゆる Gandhāra 美術研究

Gandhāra 仏教美術の編年的研究は憑依の基礎資料がすくないうえに、確実性にとぼしいので、現在に至るまで数多くの論説をみるけれども甲論乙駁で一向にまとまっていこない。編年問題とともに提起される Gandhāra 美術の系統論も、編年問題と表裏一体をなしている関係上、同様に大きく二分してしまっている。また Gandhāra 史の枠組に業績のあった古泉学 (numismatics) も異民族の出入や支配者の交替は解明しえたいにせよ、遺跡に絶対年代を与えるひとつの手がかりとはなっているにせよ、貨幣そのものに問題がある以上、年代決定の要素たりえても、ひとえにこれに頼るわけにはゆかない。

このような美術彫刻に古泉を加味した方法による Gandhāra の仏教美術研究がまとまっていこない原因は何であろうか。既に今世紀の初めに、J. Burgess が指摘したとおり<sup>2)</sup>、発掘者の態度が非科学的であり、それによって発掘した遺物に対する解釈分析が困難になったことは決定的な欠点として認めねばならない。そのうえ、このような状態が現在に至るまで多かれ少かれ続いていることも認めねばならない。今世紀のはじめから、Gandhāra の諸遺跡は Archaeological Survey of India によって‘発掘’されたが、それは字義どおりの意味しかもちえなかった。ところがこの発掘は、Chārsada<sup>3)</sup>、Takht-i-Bahi<sup>4)</sup>、Sāhri Bāhlōl<sup>5)</sup>、Shāh-jī-ki-dherī<sup>6)</sup>、などの重要な寺院ないし集落遺跡をふくんでいる。寺院の総合的なプランは一応理解しえたとしても、美術に関してはその後の研究方向に寄与する点に乏しかった。それは彫像などを寺院のなかで総合的に把握する意図にかけていること、さらに美術的に価値の高いものに大きな比重をかけた取り扱いがみられ、その他の出土品、とくに土製品は完全に無視されていたということである。

しかし、上記の寺院がこのような状況の下で発掘された一方、1912年より開始され、

## Gandhāra における土器の様相

発掘すること80所に及んだ J. Marshall の Taxila 調査がある。この発掘もその方法に非科学的な一面はあったけれども、Taxila の歴史を大局的に示したことは、Gandhāra 史ないし美術史に寄与するところが大きかった。Bh'r Mound, Sirkap, Sirsukh という三大集落址・都市遺跡の発掘とそれに伴って出土した遺物の種類・数量は膨大であり、発掘報告の方法も全種の遺物を網羅し、各遺物に対する個別的考察も加えられ、それ以前にみられない方法を採用した。このような発掘報告の方法は誠に当然のこととはいいながら実にこの Taxila をもって嚆矢とすること自体、Gandhāra 美術の基礎研究がおろそかにされていたことを示している。こういう都市遺跡ないし城郭都市の発掘は 1940-41 における R. Ghirshman のおこなった Afghanistan Kapici Bēgrām にみられる。ここでは3回の建築期があい前後しており、出土遺物についてはとくに土器と貨幣とについて詳細な考察がある<sup>8)</sup>。一方 1944-45 におこなわれた Taxila Sirkap の発掘は R. E. M. Wheeler が指揮したものであり、A. Ghosh が報告しているけれども<sup>9)</sup>、遺物のうち、とくに土器は、Marshall が特徴的な形式を選び出して論じたのに対し、全土器を分類してその出土頻度を簡単ながら記録している点とくに注目すべきである。また発掘区域が Sirkap 全域にくらべると狭小な部分でありながら、Sirkap で示される時期の土器を概観するにたるのである。さらに Wheeler は Gandhāra の中心たる Chārsada の Bālā Hissār において大きな発掘をおこなっている<sup>10)</sup>。東西に相対する二つの丘を掘り、西丘で地山直上から地表まで53層を確認し、東丘では地表から15層を確認し、それぞれの丘で特徴ある土器を検出するに至った。最初 Wheeler は先史時代まで遡りうることを期待、Indus 河上流における Harappā 文化の出現を予測していたらしいが、それは外れ、むしろ Gandhāra における初期歴史時代の土器の様相に有益な結果をもたらした。高さ 17 m のテペから層位的に出土した土器を主にする遺物は、この地方の土器による編年の研究を方向づけるものであった。

上の事情を換言すれば、Taxila においては Marshall の平面発掘を結果的に補正する意味をもって、Wheeler の発掘が Sirkap でおこなわれ、更に Gandhāra の中心たる Chārsada での垂直発掘（“Vertical Excavation”）は上述の意味で大きな成果をおさめたことになり、Gandhāra でこれまでおろそかにされてきた土器に注意が払われたわけである。その意味するところは Gandhāra 地方の初期歴史時代を土器によって編年せねばならないということである。Gandhāra における集落址、都市址、寺院址などからの土器を分類し、これらの遺跡の年代を相対的にきめ、年代順に配列するという根本的な仕事をしたうえにあって Gandhāra 美術の編年を試み、美術の系統論も考慮

されるべきである。この意味において、Wheeler の発掘はたしかに記念すべきものであり、Gandhāra 研究がはじまっておよそ1世紀になろうとする現在においても、いまだこのような基礎をおろそかにする風潮がみられることに対する警告でもある。

とくに Gandhāra 地方をはじめ、いわゆる北西インド辺疆地帯(North-West Frontier)は異民族の出入交代がはなはだしく、この点インド本土における美術の発展を支える背景と全く基盤を異にしている。したがってその美術のおこった背景は是非考えてみねばならない問題である。編年のいと口はいまみつかったばかりであり、今後それを発展させてゆく手がかりとしてこの稿を草したのである。

## 2. 土器の検討 —Chārsada の Bālā Hissār—

Chārsada の Bālā Hissār 西丘のトレンチ<sup>11)</sup> から出現した地層は地山直上から地表まで連続して53層を数える。遺物の大半は大量の土器であり、後述の“北方黒色研磨土器(Northern Black Polished Ware)”を除くとすべてが酸化炎焼成による赤色土器である<sup>12)</sup>。Wheeler は、この遺跡をわずかな土器伴出遺物、北方黒色研磨土器、その他から編年基準を4項目設け、年代を決定している<sup>13)</sup>。しかし、ここでは彼の編年方法に注意しつつも、まず土器全体を並べかえてみて、あらたに分類し直し、Chārsada の Bālā Hissār を検討することにする<sup>14)</sup>。

I. 「く」字型口縁土器(第1図23—26) この類の土器は口縁付近しか判明しないが、無頸壺の類とおもわれる。第51a層<sup>15)</sup> から第33層まで出土するだけである。第51a層にみられるように最初は腹部の張らない形であったが、それ以後は口縁直下で「く」字形にひきしまる度合がつよくなり、そこから急に腹部へとひろがってゆく形をとっている。最初の例及び第47層、第33層の例は刻目口縁である。Wheeler はこの刻目口縁をもつものだけをひとつの群にまとめているが<sup>16)</sup>、ここでとり扱うように、「く」字型口縁土器のひとつとみた方がよい。

II. 朝顔型口縁土器(第1図33—35) 第50層から第40層まででのみ出土した。これも全体の形態はわからないが、口縁の外弯してひろがった長頸部分であろう。器壁は厚く、粗い土を使っており、その上にスリップを濃くかけて横方向にいいいな研磨がみられる。スリップがかかって研磨された器表だけが赤化し、内胎は濃灰色を呈しているものが多い。無装飾のものと装飾あるものとがみられ、後者には、凸線文帯だけのもの、凸線文帯+波状沈線文がある。無装飾のものは第50層にみられる。Wheeler は特に注意

していない土器である。

Ⅲ. 大型鉢形土器(第1図1—3)第51層から第14層までほとんどいずれの層からも出土している。ところが口縁に注目して分類してみると、大きく三種類にわかれる。ひとつは(1)口縁がほぼ水平になるもので(第1図1,第3図60—62),装飾に刻目突帯(第3図62),刻目突帯+沈線文帯,刻目突帯+波状沈線文,沈線文+波状沈線文(第3図61)がみられる。次には(2)口縁が水平でなく,外側に丸みをおびているもので(第1図2,第3図47—50),装飾に沈線文帯+波状文,沈線文帯の2種類がみられ,(1)に比較すると装飾が極度に減っている。もうひとつは(3)口縁部とそれ以下の部分とがくびれによって明確に区別され,口縁部はやゝふくらみながら内湾しているものである(第1図3,第3図25,26)。装飾は沈線文帯だけが圧倒的に多く,波状文が沈線文帯の下,すなわち胴部に大きく施されているのは(第1図3),(1)及び(2)ではみられず,(1),(2)の波状文が沈線文と口縁との間の狭い帯状部に施されたものとは反対の傾向を示している。また同時に胴部に波状文をもつ鉢形土器では口縁内側にも波状文がみられる(第1図3)。以上の三種の鉢形土器を層別に検討してみると,これらがそれぞれ出土地層的にずれのあること,すなわち年代的に前後していることがわかる。(1)の鉢形土器は第51a層から第33層までに出土,(2)は第28層あたりから第20層までに大半が出土しており第19層以上でも少しく続いて用いられた。(3)は第16層から第14層までにほとんど限られて出土している。また第19層から第17層まではこの三種の範疇に全くはいらない大型鉢形土器が混在している(第3図31,32)。

Ⅳ. 皿形土器(第1図27—32,第3図33—41)第51a層から第20層まで頻繁に出土した土器で,二大別できる。

A. 1) 口縁部が直立内傾しているもの(第1図27)

2) 口縁部が肥厚して内湾しているもの(第1図28,29)

B. Aと底部周辺は共通であるが,口縁部はAのように単純でなく,外側へつよく折り曲げられた形をとっているもの(第1図30—32)

A1は器表全面にいいいな削り及び研磨あとがみられ,したがって器壁の厚さは一様である。研磨はスリップをかけたのちにおこなわれたので滑沢がでている。一方,A2はA1のような出来上りの整美さがみられない。ここで観察された削りとは,底部とそれに続く立ち上り部との境において,ここが他の部分より過度に厚くなりすぎ,焼成時における割れが問題になるほどの時,横方向に大きく施されたものである。したがってA2においてみられる削りは,見た目の整美さからおこなわれたものでなく,製陶

上おこなわれたものといえる。スリップもかかっていない例が多い(第1図28)。同時にこの例においては、轆轤から取り上げられたままの形を示した底部もみられる。

A2 は第34層以下にその例をみないが、A1 は第28層以下に主流があり、第27層以上でもまれにみられる。すなわち、第51a層から第34層あたりまでがA1の主流となる時期、第34層あたりから第22層まではA2が主流でA1とやゝ重複し、第21層、第20層で再びA1が多くなる。第19層以上、この皿形土器は急激な減少をみせる。

BはWheelerがCarinated Bowlと命名したものに相当する。形態上特異であるが、Aの口縁を外に折り曲げることによりBが生れるという成形上の僅かな差がABを区別している。ABが発生消滅の時をほぼ同じくしていることも上にのべたことを証明する一助となる。Gandhāraでは、このChārsada Bālā Hissārの外に、Shāhbāz-garhi dheriでも表面採集された。

V. 椀形土器(第1図16, 18-22)これには、Wheelerのいう“Lotus Bowls”と“Tulip Cups”及びそれ以外の椀形土器とに分類できる。“Lotus Bowl”は断面半円形の良質堅緻な椀形土器で、底部内面に開花したlotusを円形に押印しているところから命名された特殊な土器である(第1図16)。口縁外側に2条の沈線を施してある。スリップをかけてあるが研磨はしていない。“Tulip Bowls”は上下2部分を接してつくられたものであり、接続部分は段になっている(第1図18-20)。これも研磨なきスリップがけで、形態としては、特異である。“Lotus Bowl”は第24層から第20層まで、“Tulip Cup”は第28層から第22層まで出土した。

VI. 壺形土器(第1図4—15, 17) Bālā Hissārではじめて壺形土器が出現するのは第18層であり、2種検出された。その後第16層以降で多くの変化がうまれている。

VII. 北方黒色研磨土器 以上の6種の土器を形態上分類したのに反して、この北方黒色研磨土器(Northern Black Polished Ware)<sup>17)</sup>は製陶上の特殊性及びGanges-Jumna流域におけるインド考古学上の重要性からここに掲載すべきものである。Ganges-Jumna流域の例では、ほとんど皿形土器や小型鉢形土器に限定されており、器表が黒色、濃灰色、茶褐色などのヴァリエティーに富みかつそれらが光沢を帯びているところから命名された<sup>18)</sup>。

ChārsadaのBālā Hissārでは第21層、第20層で各1片ずつ出土しており、東丘で10片出土しているが、いずれも器形がわからないほどの破片である。

以上の7種の土器とその出土層とを結んで組み合わせてみると、Chārsada Bālā

## Gandhāra における土器の様相

Hissār の第51a層から第14層までは4期にわけることができる(第3図)。

Chārsada Bālā Hissār 第Ⅰ期 第51a層から第33層までの地層の厚さ 6.5 m で示される Bālā Hissār の最初期。土器は、Ⅰ.「く」字型口縁土器、Ⅱ. 朝顔型口縁土器、Ⅲ. 大型鉢形土器 (1)、Ⅳ. 皿形土器 A (1) 及び B によってほぼ代表される。同時にこの第Ⅰ期では Wheeler のいう ‘Soapy Red’ たる赤色研磨が非常な特色となっている。スリッパを濃厚にかけた上をきれいに研磨して、その感触たるや恰も新しい石鹼にふれた折に似ている事情から命名された。この赤色研磨は「く」字型口縁土器に施された例がきわめて乏しいほかは、すべての形式にほとんど全部施されており、第Ⅰ期を他と区別する大きい要素のひとつである。朝顔型口縁土器の外表だけが変化して、内部は灰色の場合があることは前にのべたが、大型鉢形土器でも同じことがいえる。赤色発色をするスリッパをかけて研磨することは下にのべる 第Ⅲ期の皿形土器にもみられるけれども、‘Soapy’ ではないことを付加せねばならない。

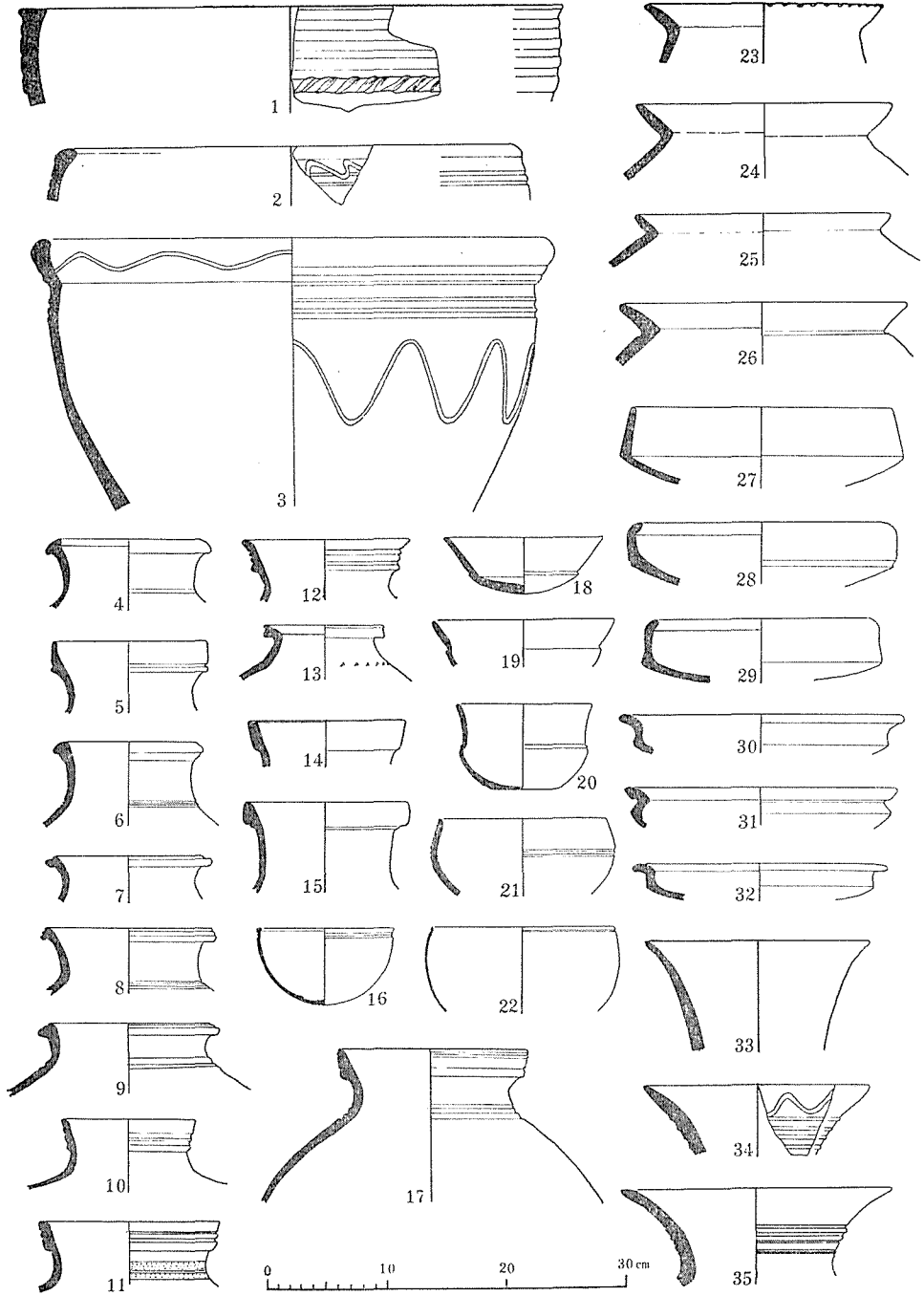
第32, 31の両層は出土の土器がいたってすくない。第30, 29両層は灰まじりの土層であるから、この4層を境とみると、確かにそれ以前と以後では土器のセット関係に相異がみられる。

第Ⅱ期、第28層から第20層までは、大型鉢形土器 (2) 及び皿形土器 A (2)、B が主流となる。さらに、‘Lotus Bowl’ の出現という重要性において第25層以下と第24層以上とを分け、第28層から第25層までをⅡa期、第24層から第20層までをⅡb期とする。‘Tulip Cup’ はこの第Ⅱ期のはじめから NBP 出現の前まで出土している。この時期の地層の厚さは 3.2 m ならずである。

第Ⅲ期もやはり、大型鉢形土器の特徴で区分できる。第19層から第17層のきわめてうすい地層 (1 m) で代表される時期で、鉢形土器は第16層以上にみられる大型鉢形土器 (3) とは全く異なった様相を呈している。また各種の口縁が入りまじってみられることも大きな特徴である。頸部が明瞭な壺形土器 (有頸壺形土器)、外側へ折り曲げたような口縁をもつ鉢形などの新形式 (第3図27, 28)、「く」字型口縁に類似するが、ずっと口縁部が短く退化したようになっている無頸壺形土器あるいは甕形土器とおもわれるものが出現して、第Ⅱ期や第Ⅰ期とは全く土器のセットが異なっているのである。また器表の装飾では、壺形土器肩部にスタンプ文を飾りまわすことがはじめておこなわれる。

第Ⅳ期は第16層から第14層までの約 1 m のうすい地層で示される時期。大型鉢形土器 (3) があらわれ、その装飾も簡素化している。前の第Ⅲ期で出現した有頸壺形土器は、

Gandhāra における土器の様相



第1図 Chārsada Bālā Hissār の土器 (縮尺 $\frac{1}{6}$ )

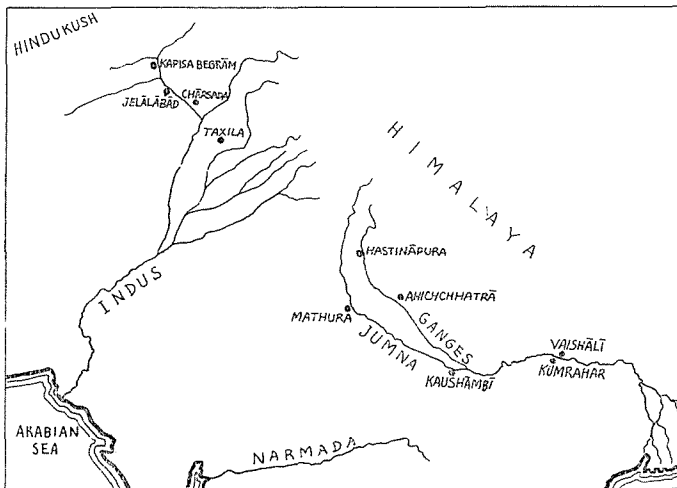
## Gandhāra における土器の様相

発展して、諸種の口縁をもつようになり、量も豊富になる。

以上のように Chārsada Bālā Ḥissār を第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期、第Ⅳ期と分けてみると、おのずから第Ⅰ期・第Ⅱ期と第Ⅲ期・第Ⅳ期とでは土器様式に大きな差違があることがわかる。第Ⅰ・Ⅱ期を前期、第Ⅲ・Ⅳ期を後期とよぶことにし、以下の考察を進めたい。

### 3. Chārsada Bālā Ḥissār 前期土器のひろがり

Chārsada Bālā Ḥissār 西丘の第51a層から第20層までは、第29層、第30層の灰層によって前後2期にわかれ、それぞれの土器は、大型鉢形土器と皿形土器とを根幹にす



第2図 遺跡分布図

、セット関係に差があることを前述した。いま第Ⅱb期における特異な土器である NBP 土器は Bālā Ḥissār 東丘の Phase III ⑦<sup>19)</sup> 以上でも10片出土したので、Bālā Ḥissār では全部で12片出土したことになる。もともと Ganges-Jumna 流域独自のものであり、彼地ではひとつの小さいトレンチより数百片の出土をする NBP 土器の最初の発見は Ahichchhatrā 最下層であったが<sup>20)</sup>、正確な層位関係における例は、Hastināpura 第Ⅲ期にみられる<sup>21)</sup>。その上層の Hastināpura 第Ⅳ期との間に地層の断絶があって、文化内容は大きな相異を示しているが、その第Ⅳ期からは、Mathurā ruler に属する5個の貨幣が出土しており、貨幣自体は B. C. 2世紀に比定されている。また



Kaushāmbī では Structural Period 9 から 16 までの間で NBP を出土し<sup>22)</sup>、そのうち Structural Period 15, 16 で、Kaushāmbī の Mitra kings に属する貨幣が出土している。それらの貨幣は B. C. 2~1 世紀を示している。以上の事実の指し示すところは、Ganges-Jumna 流域の NBP 土器の下限が B. C. 2 世紀頃かそれよりやゝおくれるものであることである。一方、Ganges-Jumna 流域におけるこの土器の上限は、鉄器の初現とほぼ結びついている。鉄器の初現を Achaemenid 朝の expansion の結果、Persia からはいったものとすれば、それは 6 世紀後半といえよう<sup>23)</sup>。一方、いわゆる西北インド辺疆地域に当る Taxila, Swāt, Chārsada における NBP 土器出土数は、それぞれ 20, 1, 12 片であり、Ganges-Jumna 流域にくらべると、数の点で比較にならない少なさをみせている。Wheeler によれば、Ganges-Jumna 流域の地方から、Maurya 朝の expansion に伴って流入したものであり、B. C. 300 年前後をこれら Gandhāra 周辺出土の NBP 土器の上限にしている<sup>24)</sup>。

以上の年代づけを認めると、Chārsada Bālā Ḥissār 第 21 層、第 20 層は B. C. 3 世紀から B. C. 2 世紀の中頃になり、それより下の各層はこの年代以前となる。同時に、Bālā Ḥissār では地山の最初の層から、鉄器が出土している。このことは、Bālā Ḥissār が B. C. 6 世紀以前には遡りえないことを示している。

この年代に相当する遺跡を Gandhāra の周辺地域で見れば、Taxila Bhīr Mound がありその第 IV 期からはすでに鉄剣片が出土している<sup>25)</sup>。表土下の第 II 期では鉄の利用が大幅に増して、武器、農工具のほか容器にもつかわれた。この第 II 期は Marshall によると装身具類が西方から輸入したものであるほかは、遺物の大勢が Maurya 的であるから、Maurya 支配の時期であるとしている。そのうちでも Marshall はとくに多くの terracotta 像があきらかに Maurya 期の特徴をみせているとする<sup>26)</sup>。ところが terracotta 像はその大半が片面のみ型造りで浮彫的につくった板像であり、Mithuna, Dampatī 像などもあり、Maurya というより Shunga の terracotta の性格を十分示している<sup>27)</sup>。また貨幣をみても、第 III 期の方に Pāṭaliputra 製の打刻文銀錢 (punch-marked coin) が圧倒的に多い<sup>28)</sup>。したがって Bhīr Mound の下限は B. C. 2 世紀と考えられる。

Taxila Bhīr Mound と Chārsada Bālā Ḥissār 第 I 期、第 II 期を土器の上で比較すると、両遺跡とも赤色土器を生産する点においては共通の性格をもっているが、詳細に個別に検討してみると、とくに Chārsada Bālā Ḥissār 第 I 期、第 II a 期では連絡するところを指摘し難い<sup>29)</sup>。これには Bhīr Mound 側にひとつの難点がある。すなわち J.

Marshall の Taxila における都市遺跡の発掘方針は平面発掘であり、したがって地表直下とおもわれる第Ⅱ期では遺物の出土量は非常に多く、限定地区を深掘りして得た第Ⅲ期、第Ⅳ期の出土遺物量は第Ⅱ期に比較したとき、かなり少なく、限られたものになっているといえよう。しかしこういう事情を考慮に入れたとしても、やはり Chārsada と Taxila とでは共通性を認めがたい。Chārsada 第Ⅰ期や第Ⅱa期の主要土器は、Taxila Bhīr Mound では全く出土していないのである。

ところが Chārsada Bālā Hissār 第Ⅱb期の土器をみると、大型鉢形土器 (2)、皿形土器 A (2) 及び皿形土器 B, “Tulip Cup”, “Lotus Bowl” があり、その他第22層では “Carinated hāṇḍi” とよばれる煮沸用の土器もある。そして第Ⅱb期の最後の層たる第21層、第20層では、NBP 土器も “Lotus Bowl” と伴出している。

一方 Taxila Bhīr Mound 第Ⅲ期に限って、型づくり提瓶や壺、小鉢に加え、大型鉢形土器、皿形土器、“Carinated hāṇḍi” が出土している (第3図82-84)。大型鉢形土器は口縁が肥厚してその下に二条の沈線文があり、Chārsada Bālā Hissār Ⅱb期のものと全く同趣である。皿形土器は、Chārsada Bālā Hissār 皿形土器 A (2) と全く同じ形式である。さらに “Carinated hāṇḍi” もある。それに加えて、Taxila Bhīr Mound 第Ⅳ期出土の Greek Black Ware は、J. Marshall によれば第Ⅲ期以上の層からの混入といい<sup>30)</sup>、さらにこの Greek Black Ware が、Wheeler および Krishna Deva によって典型的な NBP 土器と確認されるに至っては<sup>30)</sup>、全く Taxila Bhīr Mound 第Ⅲ期と Chārsada Bālā Hissār 第Ⅱb期とは同じ文化相を呈していると認めないわけにはゆかない。

こういう状況の Taxila Bhīr Mound 第Ⅲ期は、先にのべた第Ⅱ期における Shunga 期 terracotta 像の多いこと、ならびに第Ⅲ期自身で Pāṭaliputra 製の打刻文銀銭が圧倒的に多いことの二つの事情を考えれば、この時期が Maurya の影響下にあったと認めるに十分であろう。このことから NBP 土器が Maurya 朝の expansion の結果、Gandhāra や Taxila, さらに Swāt にまで流入したという仮説を裏づけることができる。

このように Chārsada と Taxila とがかなりつよい共通性をもつ時期を、Ganges-Jumna 流域でさぐると、Hastināpura 第Ⅲ期が確かな資料として浮び上る。ここでは灰色土器と赤色土器とがあり、NBP 土器はこの Hastināpura 第Ⅲ期の例をもってその典型としているほどである。灰色土器は大部分が細粒質の砂を混じ、表面は黒に近い灰色を呈している。皿形土器、椀形土器、それに Carinated hāṇḍi に限られている。

灰色土器のうちでもこれは粗質であるが、逆にきわめて良質で、かつスリッスを施したものもあり、この種の土器のうちで皿形土器では、底部内面に重圈文その他の文様を押印した例があり<sup>31)</sup>、文様こそ違え Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅱb期の“Lotus Bowl”にみられる手法と全く同じであることは特に注意を要する。この押印の例は、Hastināpura のほかにも、Kaushāmbī, Vaishalī, Kumrahar においてみられるという<sup>32)</sup>。また Kaushāmbī では NBP 土器の皿形土器に同様な押印例がある<sup>33)</sup>。Hastināpura 第Ⅲ期の NBP 土器のうちに“Carinated hānḍī”もみられる<sup>34)</sup>。

このようにみえてくると、Chārsada と Taxila とで土器のセットに共通性がある時期では、Ganges-Jumna 流域、とくに Hastināpura 第Ⅲ期ともセット関係において共通することがわかる。このことはとりもおさず、Maurya の expansion の時期には、少なくとも Ganges-Jumna 流域の上流地方と Taxila と Gandhāra とが一連の関係をもったことを証明している。Maurya というものの力によって、前代においてつながりのなかった Taxila と Gandhāra とが連絡するようになったのである。これが Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅱb期である。

それならば、第Ⅱb期より前の第Ⅱa期や第Ⅰ期においては周辺のいかなる地域とも結びつきがなかったかという点、それは Taxila とこそ結びつきはしなかったが、Gandhāra より西方の地域と連関があったのである。Chārsada 第Ⅰ期の特色たる“Soapy Red Ware”（赤色研磨で滑沢器表をもつ土器）は、Gandhāra の盆地においては、現在 Chārsada Bālā Ḥissār 以外に発見されていないが<sup>35)</sup>、この盆地を西へ Khyber 峠を通過して Sulaiman 山脈を越した現在の Jelālābād では、1965年12月筆者が2遺跡で採集することができた。Nagarahāra Bēgrām と Shāh Nasr Ghundai とがその遺跡である<sup>36)</sup>。Nagarahāra Bēgrām では‘Soapy Red’の皿形土器で Chārsada の皿形土器 A (1) 相当のものがあり、Shāh Nasr Ghundai では広大な集落遺跡南西部分の崩壊面から Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅰ期と同じ土器の組み合わせを採集した。Chārsada の「く」字型口縁土器はなかったが、朝顔型口縁土器、大型鉢形土器 (1)、皿形土器 A (1) などがある。

‘Soapy Red’ Ware の他には、Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅱ期に相当する皿形土器 A (2)、Carination が少々鈍い皿形土器 B、大型鉢形土器 (2) などが主に Nagarahāra Bēgrām 及びその周囲に散在する泥煉瓦積の遺構周辺や、石積壁付近から採集されている。さらに Gandhāra 以外の地では未発見であったいわゆる terracotta 土偶‘Baroque Ladies’も Nagarahāra Bēgrām 西側の石積壁付近の土層中から全く偶然に発見する

Gandhāra における土器の様相

ことができた。この terracotta 土偶<sup>37)</sup>は、Chārsada Bālā Hissār 第22層で1、第21層で5、第20層で2、第19層で2個出土したが、その大半がここである Chārsada Bālā Hissār 第Ⅱb 期に属しているから、Taxila と Gandhāra が連絡のあった時期の土偶といえる。

このような Nagarahāra の土器は、表面採集の限りではあるけれども、Chārsada Bālā Hissār 第Ⅰ期、第Ⅱ期に相当する文化がこの地にも及んでいたことを十分示している。

#### 4. 被征服による土器の変貌

Chārsada Bālā Hissār 第19層、第18層、第17層の地層の厚さ約 1 m の時期は第20層以前地山までの厚さが約 11 m あるのに比べ、非常に短期間である。しかし土器は第20層以前たる第Ⅰ期、第Ⅱ期の主要な形式が大型鉢形土器を残して殆んど全部なくなり、大型鉢形土器自身もそれまでと異なった口縁をもつものも出るようになる(第3図31, 32)。

土器以外の出土遺物を見ると、第18層で封泥が出ている<sup>38)</sup>。楕円形の枠の中にヘルメットを被り、槍と楯をもった右向アテナ像がある。ジルコンに陰刻された同じテーマ様式の像が Taxila Sirkap 第Ⅱ期でも出土している<sup>39)</sup>。また Chārsada Bālā Hissār 第17層では第18層に喰い込んだ建物の基礎石積が発見されたけれども石積法はいわゆる Gandhāra 寺院でみられる diaper 系統のものでなく、それ以前のものであることを示している。

このようにみると Chārsada Bālā Hissār 第Ⅲ期は NBP 土器を出土した第20層より後の時代、すなわち B. C. 2 世紀後半を上限としそれ以後の時代である。

目を Taxila に転じて、Marshall の発掘した Sirkap 及び Bhīr Mound の土器を検討すれば、Sirkap では Bhīr Mound にみられなかった形態や新形式の出現が認められ、Chārsada 第Ⅱ期と第Ⅲ期との間でみた相異ある土器の様相と同じ傾向を示している。すなわち Sirkap では (1) 大型甕形土器の変化、(2) Amphora 型壺形土器の出現、(3) 有台杯形土器の出現、の3項が Taxila Bhīr Mound と比較した場合の大きな相異である。大型甕形土器(第3図68-70)は、Bhīr Mound のもの(第3図71)は長卵円形の断面をもち、口縁直下で一旦ひきしまつて、丸底へとゆるやかな曲線をもって続いているのが特徴である。ところがこれに対して Sirkap の最初に出現する甕形土器は口縁直下のくびれはなく、肩に突帯をまわして鋭い張りを示してから胴部へ続き、さら

に胴下部とやゝ尖った底部との境で再び鋭く張っている(第3図70)。しかし、この鋭い張りが顕著な甕形土器も Taxila Sirkap 第IV期以降では、肩部の張りは消えて丸くなり、わずかに胴部と底部との境の稜と尖底とを残すのみとなるが(第3図69)、第II期に至れば肩が丸く張り、底部のつぼまった不安定な断面をとるようになる(第3図68)。このような形態の変化は、Taxila Sirkap の最初期の層たる第VII期からあらわれる Amphora 型壺形土器でも観取することができる。Amphora 型壺形土器というのは、口縁と肩部とをつなぐ一対の把手を付けた壺形土器のことであり(第3図75)、この土器も甕形土器の場合と全く同じ傾向の形態変化をする(第3図72-75)。Taxila Sirkap における初現例は甕形土器と同じように器体2個所に稜があるが、Taxila Sirkap 第IV期で稜はやゝ丸みを帯び、第III期では下部の稜がなくなり、第II期に至って完全に卵円形の断面となる。これらのうち第IV期と第III期とにおける例は黒線で加飾されている。この Amphora 型壺形土器は胴部直径に対する高さの割合が大きい、その割合が小さいもの、すなわち胴部が張って丈の低い Amphora 型壺形土器も Sirkap 第IV期以降第III期に至るまで続いて出土している。金属器を模して作られた有台杯形土器も Taxila Sirkap ではじめて出現する器であることは前述したが、これも時代の移るに従って形態に変化を生んでいる。第III期に至って杯の中央に段がつき、これを境にして下部はふくらみが目立ち、それ以前の整った形を失っており、第II期に及んではずんぐりした感を与えるようになる<sup>40)</sup>(第3図76-78)。J. Marshall による Taxila Sirkap の発掘<sup>41)</sup> において最も特徴的な土器は以上のごとく3形式で、これが Sirkap において次第に変化してゆく過程をたどることができた。

一方、Wheeler の発掘した Sirkap 都城東側の城壁と“Palace”とをつなぐトレンチ<sup>42)</sup> 出土の土器は4形式が全器を通じてもっとも頻度の高いものである。それらは(1)鉢形土器—a. 大型, b. 小型, (2)壺形土器—a. 有頸, b. 無頸, (3)甕形土器, (4)杯形土器—a. 有台, b. 無台である。このうち大型鉢形土器と無頸壺形土器が Chārsada Bālā Ḥissār 第III期の土器に共通する器形である。大型鉢形土器は Chārsada Bālā Ḥissār 大型鉢形土器(2)であり、それが主流をなしているが、その他に全く加飾のないのみみられる。また洋傘柄状の断面をもつ口縁の大型鉢形土器も Chārsada Bālā Ḥissār 第III期ではじめて出現したものであり、Taxila Sirkap でも出土している。無頸壺形土器は Taxila Sirkap で肩に段のつくものとそうでないものの2種があるが、Chārsada Bālā Ḥissār ではこのうち段のつかない例が出土している。

## Gandhāra における土器の様相

Taxila Sirkap においては上述の三形式の出土を考えたとき、Bhir Mound の土器とかなり異なった土器の様相を Sirkap においてみる事ができる。すなわち Amphora 型壺形土器とか有台杯形土器とかいうものは Taxila Bhir Mound はおろか、Ganges-Jumna 流域その他インド全体をみても出土の例に乏しく、インド在来の器でないことは明白である。同時に大型甕形土器や Amphora 型壺形土器にみられた稜をもつ土器は、Hindu-Kush 山脈の北側において、古代 Bactria 期と称される、Bactria がギリシアの植民地になる前の B. C. 7 世紀から B. C. 4 世紀頃の時期に特徴的な土器であることが、M. M. Diakonov<sup>43)</sup> や J.-C. Gardin<sup>44)</sup> によって報告されている。また同じ M. M. Diakonov の報告によると、Bactria にギリシア人がはいてくる Graeco-Bactrian 期に突然有台杯形土器が出現していることは注目すべき事実である。

このような事情を考慮するとき、Sirkap の最初の時期において Taxila が Graeco-Bactrian によって征服支配されたという古泉学その他の資料から提出された説を裏づけるものといえよう。Chārsada 第 III 期や Taxila Sirkap 出土の土器の大半が前代と全く異なったものであるということは、外来異民族の侵入あるいは支配が土器製作に大きな影響—前代と全く異なってくるというほどの—を与えた結果とみることが出来る。逆に言えば、上述のような土器の変化が、在来の製陶技術ないし土器で表現される生活様式とは全く異なった文化の到来あるいは影響を物語っている。

こういう状況の下で、Chārsada と Taxila とは十分連絡があったことがわかる。それは先にも記した無頸壺形土器と大型鉢形土器とが共通するという点においてである。Taxila Sirkap でも Chārsada Bālā Hissār でもこの両形式は使用の頻度が非常に高かった点、単なる同一形式の共通としてかたづけるわけにはゆかない。Chārsada 第 II b 期における Ganges-Jumna 流域—Taxila—Chārsada の結びつきの上に、さらにこの時期になって Taxila—Chārsada はますます連絡が深まったとみることができよう。

それならば Ganges-Jumna との関係はどのような状態にあったか、Chārsada 第 III 期や Taxila Sirkap の年代にあてはまる遺跡をたどってゆくと、Ahichchhatrā 第 VII, VI, V の各期<sup>45)</sup>、Kumrahar 第 II 期<sup>46)</sup>、Hastinapura 第 IV 期<sup>47)</sup> がほぼそれに当る。

Ahichchhatrā の第 VII 期はこの時期をもって灰色土器が終りをつける。前代でさかんであった良質薄手濃灰色の土器は、灰白色にかわり、かつ胎土も粗化した。灰色土器は皿形土器だけにみられ、赤色土器は壺形土器、甕形土器というように器形によって焼成法が明らかに区別されている。第 VI 期とそれより後の第 V 期とではすべてが赤色土器に変化、器形も特殊なものが目立つ。同時期の他の遺跡出土の土器と器形上連絡がつ

け難くなる。Hastināpura 第 III 期と第 IV 期との間には厚い焼土層があって、第 IV 期の文化は NBP 土器を多数出土した第 III 期の文化と全く異質なもので、第 III 期の土器は完全に消滅し去っている。

Ganges-Jumna 流域は製陶技術の点からみれば前代とはまったくつながりなく、一変している。単に変化という点においては Gandhāra も Ganges-Jumna 流域も同じである。しかし土器形式上の連絡は両地域に何ひとつ考えられず、Chārsada 第 II b 期のような関係はもはやなくなっている。一方、Gandhāra においては、この Chārsada 第 III 期の土器は様式上第 II 期と異なっているが、Taxila-Chārsada という結合が、前代のつながりをふまえた上で更に一層強くなったといえる。その一方において Ganges-Jumna 流域とは疎遠になっている。

また Gandhāra と Nagarahāra とは前代以来の関係にあることが、無頸壺形土器によって示されている (第 3 図10, 29, 30)。

つぎに Chārsada Balā Ḥissār 第 III 期に続く第 IV 期は、大型鉢形土器 (2) から大型鉢形土器 (3) に移る時期で、前代に出現した洋傘柄状の断面をもつ大型鉢形土器もつゝいて出土している。壺形土器とおもわれる大型の口縁もある。この時期ではじめて出現した形式に蓋形土器がある。2種類あって、ひとつは (1) 口縁が外へひろがった碗のような形をしていて、内部底中央にひとつの撮みがあり、この撮みの高さが口縁部より低く、真横からこの碗をみた時には撮みが全くかくれて見えないもの (第3図15, 16)、他は (2) 小皿にやはり撮みがついているが、これは横からみても口縁部より高く突出している (第 3 図14)。壺形土器は既に第18層で2種出現しているが、第16層になるとそれが発展したものとして2種あるほかに更に2種生れ、第15層では、第16層であらたに出現したものが発展して variation を生んでいる。第14層の3種は、以上の数種とは関連ない。

このように壺形土器が急激に増加する事実に合わせて Gandhāra 周辺の地域をみると、Afghanistan は Kapisa Bēgrām<sup>48)</sup> の第 II 期が同様な傾向を示していることに想到する。器形は限定されながらも<sup>49)</sup>、Kapisa Bēgrām 第 I 期で出土した灰色土器は、第 II 期になって全く出土せず、すべて赤色土器になっている。その中で壺形土器は非常に堅緻な焼成で、一般に器壁は厚い。壺形土器はほとんど口縁部しかわからないが、口縁部は Chārsada のものと類似しない (第3図6-9)。また壺形土器のうちでも Amphora は第 I 期からひきつづいておこなわれたが、第 II 期でもっとも流行する (第3図1, 2)。

## Gandhāra における土器の様相

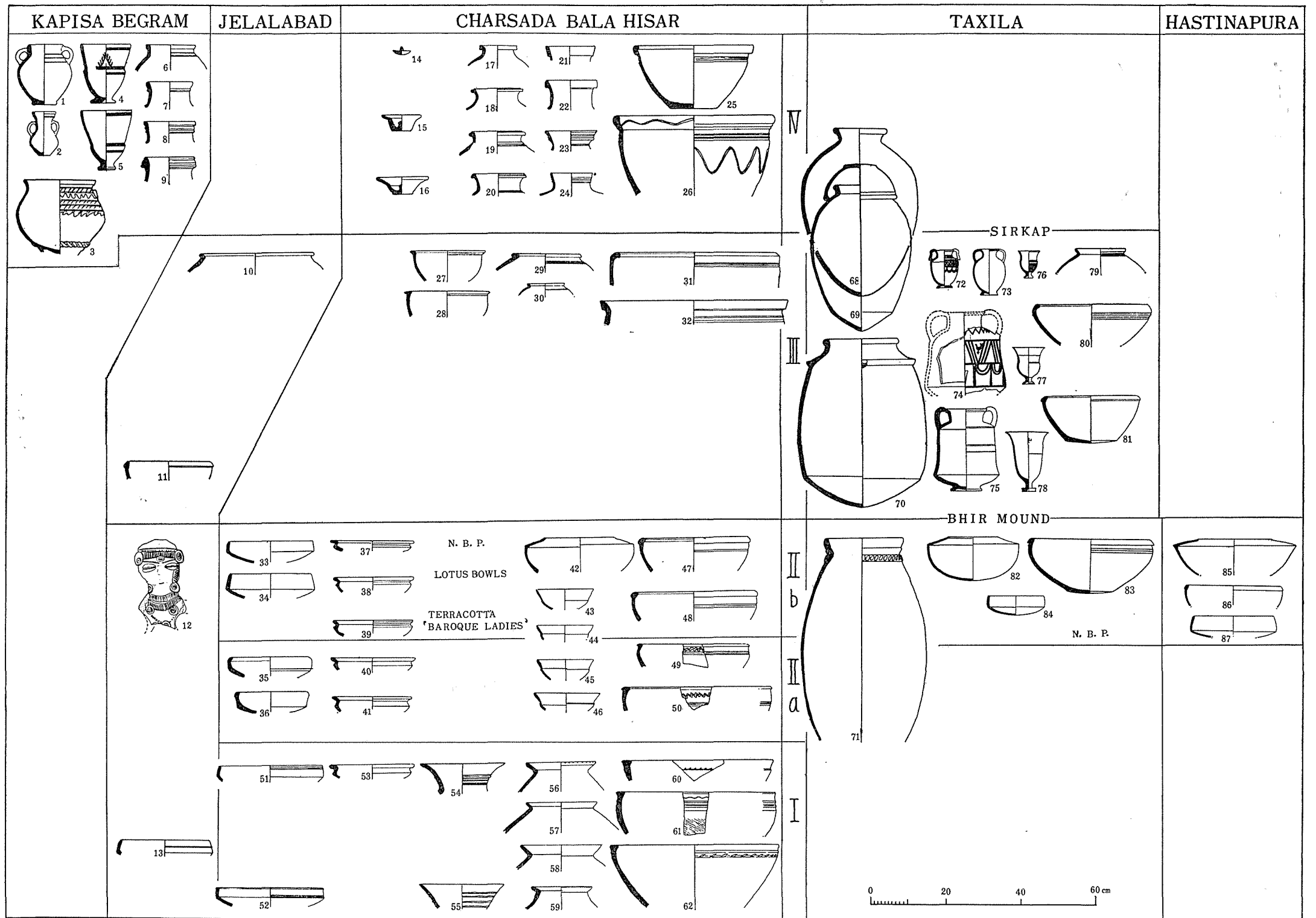
この一対の把手をつけた壺形土器は Taxila Sirkap の項で記したとおり、西方的な土器であり、さらに第Ⅱ期で有台杯形土器が盛んに利用されたことや（第3図4,5）、Krater 型土器（第3図3）も第Ⅰ期にひきつゞき残存していることなどの点から、Chārsada と性格を同じにするのは単に壺形土器の急増という面だけである。

Bēgrām 第Ⅱ期の土器の組合せを考えた場合、Amphora 型壺形土器、有台杯形土器、Krater 型土器が頻度高く、Taxila Sirkap の土器の組合せに非常に類似している。同時に壺形土器（Amphora 型は除く）の急増という点では、Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅳ期と一致した性格がみられる。それなら Bēgrām 第Ⅱ期は、Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅳ期よりやや前の時期を示しているのであろうか。ここで、Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅳ期の土器以外の出土遺物をみると、第17層の石積がいわゆる diaper でないことは前にのべたが、第15層、第14層の遺物が第Ⅳ期の年代を語っているようにおもわれる。すなわち、第14層では、Gandhāra 仏教寺院にみられる片岩製の供養者像が出土しており<sup>50)</sup>、H. Ingholt によれば彼の分類の第Ⅳ群にはいり<sup>51)</sup>、A. D. 5世紀の前半になる。第14層の壺形土器は第15層、第16層のそれとは直接連続してゆかないから（第3図17,21,22）、第15層出土の片岩製化粧皿の年代を Wheeler によって、A. D. 2世紀以降においたとして、A. D. 2世紀ごろと A. D. 5世紀ごろの地層が連続していてもあまり問題にはならない<sup>52)</sup>。一方、Kapisa Bēgrām 第Ⅱ期は Kanishka 貨が44、Huvishka 貨が59、Vāsudeva 貨が8枚出土しているから、土器以外の遺物からみれば、Chārsada Bālā Ḥissār 第Ⅳ期と Kapisa Bēgrām 第Ⅱ期とは年代的にほとんど同じとみてよいであろう。そうなれば、Kapisa Bēgrām 第Ⅱ期の土器の様相は、Gandhāra 地方とは全く別の文化圏にはいるものとして区別せねばなるまい。先に述べた Kapisa Bēgrām 第Ⅱ期の西方的な土器の組み合わせを Bactria 地方に求めて、Kapisa Bēgrām 第Ⅱ期を Bactria の文化圏に入れようとする試みは、Gardin や Diakonov による限り可能と思われる<sup>53)</sup>。壺形土器の急増という現象は、Kapisa Bēgrām がその第Ⅱ期にあって、Chārsada と非常に密接なつながりをもっていたということもできよう。しかし、むしろ Kushān 朝というものの著しい特質として、とくに‘急増’という事情に注目すべきである。

## 5. Gandhāra 美術成立の背景

Gandhāra 美術の成立した背景として、多くの要素が考えられる。しかしここではそ





第3図 Charsada Balā Hissār の土器と周辺地域の土器 (縮尺 1/2, ただし 68, 69, 70, 71 は 1/24)

の要素のひとつとして土器を抽出し、以上のべてきたことを総合しつゝ、土器を通して背景をさぐってみたい。

Chārsada Bālā Ḥissār は Peshāwar 盆地の中心にあって、Pushukalāvati に比定されているが、その最初の時期 (Chārsada Bālā Ḥissār 第 I 期) は Taxila の Bhir Mound 最下層の時期と同時でありながら、土器上の関係は全くない。たゞ酸化炎焼成による赤色土器という点において共通性が認められるにすぎない。その一方において Gandhāra が Sulaiman 山脈の西の Nagarahāra と殆んど同一の文化圏中にあることが特異な赤色研磨土器を共有することから確証できたのである。Gandhāra と Nagarahāra とのこのような結びつきは単に Chārsada Bālā Ḥissār 第 I 期で示される時期だけにとどまらず、その次の第 II 期でも認めることができた。現在の資料を基にして主張できる Gandhāra—Nagarahāra の密接な関連性はおそらく B. C. 2 世紀中頃までである<sup>54)</sup>。しかし、Chārsada Bālā Ḥissār 第 III 期の無頸壺形土器(第3図29,30)が Nagarahāra Bēgrām に存在するという単に一形式の土器をとりあげて両地の関係を論じうるのなら、Graeco-Bactrian が侵入してくる時期まで下げて、両地方の関連性を認めることができる。

こういう状況の下に、Gandhāra と Taxila が共通の基盤に立つようになるのは、Ganges-Jumna 流域から Maurya が版図を拡大してくる時期においてはじめて確認できる。したがって、この時期は、一時的なものにせよ、Ganges-Jumna 流域—西部 Panjāb (Taxila)—Gandhāra—Nagarahāra という広い地域がひとつの路線に乗ることになる。

次の時期、すなわち Chārsada Bālā Ḥissār 第 III 期—Taxila Sirkap の時期では前代にみられた Ganges-Jumna 流域との連絡はなくなっている。その一方で Chārsada と Taxila とは前代より強く結びついているのである。ところがこの時期からは、ちょうど外来異民族が次々と侵入してくる時期に当る。そういう時期に何故、Chārsada と Taxila とがよりつよく結びついていったか、これはまた別の問題であろう。

こういう侵入の時期を物語る好例は土器の変化で、Chārsada 第 III 期ではそれより前の時期の土器とは殆んど共通するものがなく、Taxila Sirkap では、在来の形式にあらざる形式の土器が出現している。外来異民族の到来は製陶技術にも測り知れないほどの強い影響を与えずにはおかなかったといえよう。

Kushān 期の遺跡は多いけれども、そこから出土した土器は未整理であり、ここで土器の様相を示す資料たりえない。しかし、少なくとも Chārsada Bālā Ḥissār 第 IV 期

## Gandhāra における土器の様相

や Bēgrām (Kapisa) 第Ⅱ期で観取しえたのは、前代の基礎に立った土器の発展であり、それはとくに壺形土器にみられた。壺形土器が急激に増加してゆく状態は、Kushān の急速の発展を示すものである。しかし、ここでとくに注意せねばならないことは、Kapisa Bēgrām の土器の様相が、Gandhāra と全く相入れないものであることで、むしろ Bactria 地方に傾いた内容を示しているのは、この時期に至っても Gandhāra が Nagarāhāra あたりまでしか土着の文化圏をもちえなかったことを如実にあらわしているようである。

このようにある時期の土器様式のひろがりという面で Gandhāra とその周辺関連地域をとらえてゆくとき、Gandhāra と Nagarāhāra という地域は、Indus 河の東に位置する Taxila より、ずっと早くから共通性があったのである。それが Kābul 河を媒介にしたものであれ、冬期積雪をみない Khyber 峠付近の交通と関連したものであれ、とにかくこの基盤は、Gandhāra 仏教美術が展開したひとつの大きい背景となっていたことを疑わない。

以上のような地理的な背景と同時に、Graeco-Bactrian 期以降の被征服の時代における土器が示す変貌、すなわち Graeco-Bactrian 期以前の土器様式が完全にくずれて、新形式が出現するという変貌およびその新形式が次第に変形してゆく過程は、この時期の不安定さとともに在来の製陶技術が根強いことも示しており、このような状況の下に Kushān が出現したことは誠に意味深いといわねばならない。

(筆者は京都大学大学院学生)

## 註

- 1) この論文は1965年度京都大学大学院修士課程修了論文として書かれたものに、京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊に参加して得た知見を加え、修正再吟味したものである。調査隊において諸々の御教示を賜った水野清一教授、ならびにいろいろな suggestion を頂いた小野山節氏に心から感謝の意を表したい。
- 2) A. Grünwedel, *Buddhistische Kunst in Indien*, 1893 の英訳 *Buddhist Art in India*, 1901 の序に “The difficulties in interpreting the Gandhāran Buddhist sculptures arise chiefly from their fragmentary and unconnected condition. This has been lamentably increased by the ignorance or disregard of scientific methods on the part of the excavators of these remains.” とのべている。
- 3) J. Marshall and J. Ph. Vogel, *Excavations at Charsada, Archaeological Survey of India, Annual Report (ARASI), 1902-1903.*

Gandhāra における土器の様相

- 4) D. B. Spooner, Excavations at Takht-i-Bahi, ARASI, 1907-08 及び H. Hargreaves, Excavations at Takht-i-Bahi, ARASI, 1910-1911.
- 5) D. B. Spooner, Excavations at Sahri Bahlol, ARASI, 1909-10, 及び A. Stein, Excavations at Sahri Bahlol, ARASI, 1911-12.
- 6) D. B. Spooner, Excavations at Shah-ji-ki-Dheri, ARASI, 1909-10 及び H. Hargreaves, Excavations at Shah-ji-ki-Dheri, ARASI, 1910-11.
- 7) J. Marshall, Excavations at Taxila, ARASI, 1912-16, 1926-33.  
—do—, Excavations at Taxila, the stupa and Monasteries at Jaulian, *Memoirs of the Archaeological Survey of India* (MASI), No. 7, 1921.  
—do—, Taxila, An Illustrated Account of Archaeological Excavations (Taxila), 3 vols, 1951.
- 8) R. Ghirshman, Bēgrām, Recherches archéologiques et historiques sur les Kouchans, *Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan* (MDAFA), Tome XII, 1946.
- 9) A. Ghosh, Taxila (Sirkap) 1944-45, *Ancient India, Bulletin of the Archaeological Survey of India* (AI), No. 4, pp. 41-84.
- 10) R. E. M. Wheeler, Charsada, A Metropolis of the North-West Frontier, 1962. (R. E. M. W, Charsada).
- 11) Wheeler は Chārsada Bālā Ḥissār で Ch. I から Ch. V までのトレンチを入れた。Bālā Ḥissār は東西に小高い遺構があるから、ここでは Ch. I を西丘のトレンチ, Ch. IV と Ch. V とを東丘のトレンチとした。
- 12) 赤色土器という言葉はここではすべて灰色土器に対するものとして用いた。したがってこの赤色土器は酸化炎焼成によってできたものであり、灰色土器とは還元炎焼成によってできたものである。
- 13) 編年基準とは (1) 鉄器使用と Achaemenid Persia の Gandhāra 支配, (2) Bālā Ḥissār をとりまくとおもわれる濠と Alexander 大王の来襲, (3) Northern Black Polished Ware の出土, (4) Gandhāra 仏教寺院でしばしば出土する供養者の丸彫の出土, cf. R. E. M. Wheeler, Charsada, pp. 33-36.
- 14) Wheeler は土器の Key-type として, (1) 'Rippled rim' ware, (2) 'Soapy red' ware, (3) Wavy-line bowls, (4) Dishes with incurved sides, (5) Carinated bowls, (6) Tulip Bowls or Cups, (7) Lotus Bowls, (8) Northern Black Polished Ware をとりあげている。cf. Wheeler, Charsada, pp. 37-46.
- 15) Wheeler は地層番号を地表から順につけているから、数が小さいほど地表に近い。第 51a

## Gandhāra における土器の様相

層というのは地山直上の層。

- 16) 刻目口縁とは 'Rippled rim' Ware. 註 14) を参照。
- 17) 以下, NBP 土器と略す。
- 18) 北方黒色研磨土器については, Wheeler, Chārsada, pp. 41-46. 同じ著者の, *Early India and Pakistan to Ashoka*, 1959, pp. 30-31. この土器の最初の報告は, Krishna Deva & R. E. M. Wheeler, 'Northern Black Polished Ware' (N. B. P. Ware), AI No. 1 pp. 55-58. このレポートは A. Ghosh と K. C. Panigrahi, *The Pottery of Ahichchhatra, District Barāilly, U. P.*, AI No. 1, pp. 55-58 の Appendix として書かれている。
- 19) Bālā Hissār 東丘の Phase III とは建物あとで, 最下層の建物を Phase I としている。① ② というのは堆積層につけられた番号で, 地表から順に ① ②……とつけられている。cf. Wheeler, Charsada, p. 29, fig. 7.
- 20) A. Ghosh & K. C. Panigrahi, *The Pottery of Ahichchhatra*, AI, No. 1, pp. 40-43.
- 21) B. B. Lal, *Excavation at Hastināpura and other Explorations in the Upper Gangā and Sutlej Basins 1950-52: New Light on the Dark Age between the end of the Harappā culture and the Early Historical Period*, AI, Nos. 10-11, p. 15, pp. 50-53, p. 52, fig. 14. ここでは第 I 期がもっとも古く, 第 V 期がもっとも新しい時代である。
- 22) G. R. Sharma, *The Excavations at Kausāmbi*, 1960, pl. 4.
- 23) これは Wheeler の主張するところであり, 現在これに反論を下す何の資料も論説もきかない。cf. R. E. M. Wheeler, Chārsada, pp. 43-44.
- 24) Wheeler は, *Early India and Pakistan*, 1959, p. 31 では NBP の Gandhāra 地方での年代を B. C. 320-B. C. 150 に当てているが, Chārsada, 1962, p. 44 では上限を20年下げて B. C. 300-B. C. 150 としている。
- 25) J. Marshall, *Taxila*, 1951 では, 地表直下の層を第 I 期とし, 最下層を第 IV 期というふうによんでおり, 一般に認められている方法と逆であるから注意を要する。  
また鉄剣片, その他の鉄製品については J. Marshall, *Taxila*, Vol II, 1951, p. 538.
- 26) J. Marshall, *A Guide to Taxila*, 1960, fourth ed., pp. 58-59. 及び同著者, *Taxila* Vol. III, Pl. 132-133, Nos. 10-14, 16-24, 28-29, 35.
- 27) ところが, V. A. Smith は Shunga の版図は Panjab にまでは及んでいないとし (V. A. Smith, *History of India*, Reprinted from the fourth edition, 1957, p. 209.), Pushyamitra 王が軍勢をもって Indus 河に達したという Wilson の記述 (Wilson, *Theatre of the Hindus*, ii, p. 353; A. Cunningham, *Numismatic Chronicle*, 1870, p. 227) は誤解なりとしている。しかし, V. A. Smith より数十年を経た今, Shunga の版図に関する論をきかない。
- 28) Marshall は, *Bhir Mound* 第 III 期の地層 (near the eastern limit of the main excavated

- area in a small square 32•26') において壺にはいった古銭類を発見した。その古銭は1163枚の Maurya 銀銭の他に、磨滅した Persian siglos と真新しい Alexander 貨2枚, Philip Aridaeus 貨1枚とを含んでいた。cf. J. Marshall, Taxila, Vol. II, pp. 104.
- 29) J. Marshall, Taxila, Vol. II, pp. 432 以降。
- 30) Krishna Deva & R. E. M. W., AI, No. 1, pp. 55-58, fig. 10, XV-XVII.
- 31) B. B. Lal, AI, Nos. 10-11, p. 56, fig. 16, XVIII, XVIII a~d.
- 32) Ibid., p. 57, Type XVIII の項。
- 33) Archaeological Survey of India, North-Western Circle, New Delhi (Safdarjan Museum) において筆者が1966年1月に観察した。G. R. Sharma の報告書には記載ない。
- 34) B. B. Lal, AI, Nos. 10-11, p. 52, fig. 14, 10. Safdarjan Museum での筆者の観察によると、この例においては、Carination 以下の部分に横削りがみられ、粒子が右から左へ動いた跡がある。Carination 以上はあたかも自然釉がかかったかのごとき状態を器表は呈し、一面に鉄錆のような斑点が認められる。
- 35) 未発見ということであって、Shāhbāz-garhi Dheri や Sari Dheri では発掘によって十分出土することが予想される。
- 36) Nagarahāra Bēgrām はおそらく1964年に、イギリスの考古学徒が西側の一部を試掘したが、その報告はなく、それ以前には全く発掘例がない。Shāh Nasr Ghundai も未発掘である。両遺跡とも Jelālābād の西に在り、前者は新街道と Kābul 河との中間、後者は旧街道沿いにあり、Jelālābād の中心から約10キロ。Nagarahāra Bēgrām 採集土器はすべて赤色土器で、(1) 混砂粗製のもの、(2) スリップがけ良質精製、(3) スリップがけ良質精製で研磨の施されたものの三種ある。(1) には壺形土器が多く、皿形土器もやゝみられる。(2) は皿形土器、碗形土器、(3) は皿形土器。1965年12月の筆者の調査による。
- 37) 'Baroque Ladies' という名称は1958年の Wheeler による Chārsada 発掘の時命名された。cf. R. E. M. Wheeler, Chārsada, pp. 105-108 及び Pl. XX-XXV.
- 38) Wheeler, Chārsada, Pl. XL, A, 2.
- 39) J. Marshall, Taxila, Vol II, Chapter 31, Class IX, p. 650, 及び Vol III, Pl. 207, 10 a~i.
- 40) 金属杯を模倣したものであることは次に明らかである。cf. J. Marshall, Taxila, Vol. III, Pl. 174, Nos. 272, 273, Pl. 187, Nos. 5a, 5b.
- 41) J. Marshall, Taxila, 3 Vols. 1951 に含まれている。
- 42) 註9の報告による。
- 43) М. М. Дьяконов, Археологические Работы в Нижнем Течении реки Кафирнигана (Кожаднан) (1950-51 гг.) Материалы и Исследования по Археологии СССР No. 37, 1953, pp. 253-293, pl. XI.

Gandhāra における土器の様相

- 44) J.-C. Gardin, *Céramiques de Bactres*, MDFAFA, Tome XV, 1957.
- 45) A. Ghosh, *AI*, No. 1, pp. 37-40.
- 46) A. S. Altekar & Vijayakanta Mishra, *Report on Kumrahar Excavations*, 1959, pp. 18-20.
- 47) B. B. Lal, *AI*, Nos. 10-11, pp. 21-25.
- 48) 註8の報告による。R. Ghirshman, *MDFAFA*, Tome XII, 1946.
- 49) *Ibid*, p. 44.
- 50) R. E. M. Wheeler, *Chārsada*, Pl. XLIII, A.
- 51) H. Ingholt, *Gandharan Art in Pakistan*, Introduction, p. 39.
- 52) 実際 Chārsada Bālā Hissār の第19層以上の時代は、この遺跡に北接する Sheikhān Dheri に居住区が移動しており、その事もこの地層間における年代の長さを証明している。Sheikhān Dheri は Wheeler の記述もあるが (cf. R. E. M. Wheeler, *Chārsada*, pp. 16-17.), 既に 1963年, 1964年の2シーズンにわたって、the Department of Archaeology, University of Peshawar の A. H. Dani 及び F. A. Durrani によって発掘され、最下層が Graeco-Bactrian 期、ついで Saka-Parthian 期、それに Kushān 時代の建物も確認された。したがって Taxila Sirkap+Kushān 期ということになり、連続して同一都市が Kushān まで使用されている点注目に値する。報告書未刊。
- 53) Kapisa Bēgrām の地方が Gandhāra 文化圏にあるというより、むしろ Bactria 文化圏にあるとしたい理由に現代民俗例を引いてくるのは不当であろうか。Amphora 型壺は現代では一時的な貯水用として用いられ、Bactria 地方である Hindu-Kush 山脈の北部の Qunduz から Baghlān に、Hindu-Kush 山中の Bāmiyān, さらに Kābul 近辺におよんでいる。ところが Qunduz から南するにつれて把手は次第に小さくなる。Jelālābād 付近ではほとんど使われていない。Sulaiman 山脈をこして、Pakistan にはいると全く見当らない。現代の陶窯構造についても、Bactria たる Qunduz 地方から Kābul 周辺までは、円筒形の窯で、ちょうど、Iran の Sialk 第Ⅲ期 (B.C. 第4千年期前半) の窯をおもわせる構造であり、泥煉瓦と泥土とで築かれてあるが、Jelālābād から Pakistān Peshāwar 盆地以南では、半永久的な窯は構築せず、床は地面を 20~30 cm 掘りくぼめた長方形で、やゝ傾斜がある。窯壁とよぶべきものは、奥壁は家の土壁である場合が多く、その他は焼成におよんで随時乾燥した禾本科植物 (ムギ・ヨシなど)・牛糞燃料・泥土で築く。要するに野積のやゝ高度なもの。
- 54) 採集された資料に基く限りこのような年代までは確実に両地はつながりあっている。しかし、それ以後も同様の結合連絡があったことは、無頸壺形土器などからも十分推測される。